

続

徒然  
つれづれ

## 庁内報は必要か

桑野 巍

映画演劇を20数年間にわたって担当した記者が転職することになったという。取材経験を生かして一般企業の広報室に勤務するらしいのだ。彼の転職決断を事前に知らなかったものだからこちらも驚いた。「何かあったのか」と問うと、彼は「別に」と答えるだけ。現役のころ、映画制作会社の宣伝マンに脅された話は聞いたことがあるが、それが原因かどうかはわからないので詮索はしなかった。

彼は新作品の映画を試写して「評」を書いたところ、その新聞を片手に「あなたの映画の見方や評論は間違っている。悪口が多過ぎるではないか」というお叱りを何度ももらったようだ。こうした記事は影響が大きく、時には「どうしてくれる」と迫られることもあったという。興行側からすれば、記者連中に真っ先に見せて宣伝の一翼を担ってもらおうというわけだが「これでは営業に響く」と言われたこともあった。彼は長所もとらえるが短所も書くという冷静さを持っていたが、今度は企業広報室で一種の宣伝マン業にも挑戦するし、社内報の編集も受け持つと聞く。

社内報づくりは簡単なようで「社内的立場、業界の対外的立場があり、それなりの苦労が絶えないのではない。芸能記者の経験が役に立つといいけど」と言っておいたが果たして励ましの言葉になったかどうか。

先輩面をしても今さら尊敬されることを望まないが、私も現役の時に企業の社内報を集めたことがあったので「とにかくソフトな紙面づくりが好感されるよ」とだけ言って京都の企業広報誌の一例を説明した。それは若い社員へのアンケート調査の結果をまとめた記事で、20数年前に入手した社内報の内容だ。

質問の項目は①現代の日本をもっともよく表わしている日本の象徴は何②良きにつけ悪きにつけ「ああ私は日本人だ」と思うのはどんな時③日本に生まれてよかったと思うのはどんな時④現存する日本の習慣、もの、生活様式、文化などで100年後も残ると思うものは⑤過去の日本の時代の中で、いちばんロマンを感じ、憧れるのはどんな時代⑥もう一度味わってみたい日本の味とはどんなもの⑦もう一度

眺めてみたい心に残る日本の風景とはどんな風景——の7問である。

当時の若い社員たち8人の答が面白かった。日本の象徴ベスト5は富士山、平和、桜、勤勉、天皇で、ほかにうさぎ小屋、交通渋滞、カラオケがあった。「日本人だなあ」と思うのはせっかちな性格、米の飯が好き、日本語以外の言葉を話す人と一緒にいる時の自分など。日本に生まれてよかったと思うのはニュース映像で他国の戦争を見たとき、治安がよいこと、便利な国になったこと、和食がおいしいことなど。

日本の習慣、生活様式、文化などで100年後も残ると思うものは、米、たたみ、着物、こたつ、除夜の鐘、茶道、和食、布団、おじぎ、日本酒、演歌、祭、書道など。いちばんロマンを感じた憧れの時代はものあわれを感じたであろう平安時代、文明開化の音がした明治初期を挙げた人が多かったが、ずばり「現代」と答えた若者もいた。懐しい日本の味は四季の和風弁当、すき焼、栗饅頭、駄菓子類、流しそうめんなど。心に残る日本の風景は嵐山、嵯峨野の竹林と紅葉などいかにも京都らしい所を挙げていたが、雪をかぶった富士山、阿蘇山などもあった。

編集担当者の質問もあっさりしていて好感が持てたし、若い社員の素直な答も「おやまあ。へえー」で面白く、回答者の顔写真も皆んな笑顔で、日本再発見的な柔らかか企画だった。社内報は速報性や予想屋の要素の必要性はなく、それなりのゆとりと和み<sup>なご</sup>が汲み取れるのであればそれでよしだし、家庭に持ち帰って家族ともどもが読者になれば意義ある読み物なのだ。

では今どき自治体にはどんな“社内報”があるのだろうか。知る由もないが今や自治体もネット社会・庁内ランの時代だから、活字の庁内報不要論もあろう。予算がないので「NO」の職場もあろう。それでも活字の威力をフル活用し、庁内情報を共有できる庁内報があればと望むのはお節介<sup>せつけい</sup>だろうか。住民福祉に真剣に取り組む職員にロマンとソフト感覚を持ち合わせてもらう媒体がほしいものだ。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）